



## 農村の生活改善と

### 婦人の地位向上に尽力

# 伊藤 まつを

伊藤まつをは、明治に生まれ岩手から出ることなく、流れ行く大正、昭和、平成の世を教師として農家の主婦として、農村家庭の生活改善運動や婦人の地位向上につくした人物である。

一八九四年（明治二十七年）、伊藤まつをは、胆沢郡南都田（現・胆沢区南都田）に生まれた。「砂糖孫」と呼ばれるほど甘く育てられ、中でもまつをは、祖父に溺愛される。

一九一四年（大正三年）三月岩手師範学校女子部（現在の岩手大 学教育学部）を卒業したまつをは、故郷の南都田尋常高等小学校 に赴任する。一九一五年（大正四年）、同僚の教師、伊藤清一と結婚し、翌年には、嫁ぎ先に近い、小山小学校へ転勤する。「砂糖孫」として大切に育てられたまつをはにとって「農家の嫁」という立場は、想像を絶するものであった。長男を出産すると、学校、家事、農業、育児の四役をこなすため、朝三時に起床。掃除、食事の準備、学校、水汲み、洗濯と一日中休む間もなく働き続けた。

一九二二年（大正十一年）、姑のイツが亡くなる。遺された義弟妹五人の養育が肩にかかってくる。給料は、義弟妹の仕送りに消え、まつをは、八月に三男を出産するが、学校の昼休みに戻って乳をのませて育てたそうだ。

一九三一年（昭和六年）、義弟を三人も大学や専門学校に進学させ、十七年間の勤続の教職をやめ、家庭婦人としての生活に入る。

一九三二年（昭和七年）、夫清一は、小山村助役となる。まつをは、第一次生活改善を断行した。台所に井戸を掘り、手押しポンプを取り付け、流しもつけた。また、台所を仕切って、食堂と主婦の部屋を作った。

一九三八年（昭和十三年）、夫清一が小山村長になると同時にまつをは、愛国婦人会小山分会会長となる。第二次生活改善として、風呂場にも井戸を掘り、手押しポンプを取り付ける。

一九四〇年（昭和十五年）、婦人会として、小山出身の兵士に会報を送り始める。そして終戦後は、自発的に婦人の組織を作り「母姉会」と名づけ活動を開始する。一九四七年（昭和二十二年）には、小山村婦人会を組織して、会長となって生活改善運動を呼びかける。改善計画は、

第一部門 封建性の打破、迷信の追放

第二部門 時間の励行

第三部門 住宅の改善（台所、納戸、便所、風呂場）

第四部門 食生活の改善

第五部門 保健衛生

第六部門 冠婚葬祭の簡素化

第七部門 レクリエーションであった。まつをは、第一部門と第三

部門の担当だった。台所の改善は、農村婦人の過労を救い、健康維持に重大な関係があると考えた。五年後には、必ず村を盛り上げてみせようと考えたまつをは、足しげく村をまわった。台所改造や住居改造をしたところを見せてもらい、写真に撮らせてもらった。その写真を添えて改善点などを解説して展示した「生活改善展示会」を開催した。

改善の具体的なものは、

一、ガラスを入れて明るくなった。

二、ポンプが入って水汲みの苦労が解消した。

三、流しがあった。

四、子どもの部屋、婦人の部屋などができた。

五、風呂場、便所の改造

六、納戸を改造、新郎新婦の部屋を作った

などである。

特に、家にポンプが入ったことは、婦人たちを大変喜ばせたそうだ。今までは暗くなるまで働いて、家に帰ってから今度は水汲みしなければならなかったがそれがなくなった。風呂場に蛇口をつけた農家では、今まで一桶一桶運びこまなければならなかった水を、学校前の子どもに番をさせて水を流しこめばよいようになった。

一九五一年（昭和二十六年）婦人会に推薦され、小山村（現・胆沢区）村会議員に立候補し当選するが、村会議員を一期（四年）で辞めると、翌年から生活改善運動推進のために、講師となって、もんに地下足袋ばきで県下をまわってあるく。

一九六三年（昭和三十八年）夫清一が胆沢村村長となる。

一九七〇年（昭和四十五年）自叙伝「石ころのはるかな道」を講談社より出版する。岩手日報社主催、読書感想文コンクールの課題図書に選定される。

一九七一年（昭和四十六年）長男清男のことを書いた「石ころの子と生きる・・・ある農村青年の愛と死」を講談社より出版する。

一九七五年（昭和五十年）、「石ころの孫たち」を熊谷印刷より出版する。

一九八三年（昭和五十八年）、夫清一が亡くなる。夫の追悼集「山

ゆりのうた」をまとめる。最後の生活改善として、自室に専用の風呂を作る。

一九八八年（昭和六十三年）「伊藤清一日記抄（にっきしやう）」 明治、大正、昭和、三代九十年を生きる」を岩手出版より出版。

一九九二年（平成四年）詩集「白寿の青春」を作成。洗濯機を自室の廊下にセットし、合理的な生活と自分のことは自分ですることを生涯貫き（つらぬ）、翌年の二月二十四日、夜明け方、九十八歳で静かにあの世へ旅立つ。



\*参考文献

「石ころのはるかな道」

「まつを媪百歳を生きる力」

伊藤まつを

石川 純子



『石ころのはるかな道』を出版したころの清一・まつを夫妻。  
昭和45年2月、76歳。